
ドゥルーズの芸術哲学——感覚・記念碑・可能

小倉拓也 (大阪大学)

失われたときを見いだすことでも、記憶の箱をこじ開けることでもなく、みずからの喘息のリズムに合わせて速度の支配者となること。それは滅亡に立ち向かうのと同じことだった。語り手は、いくつもの部分的な勝利にもかかわらず、この試みに挫折するだろう。

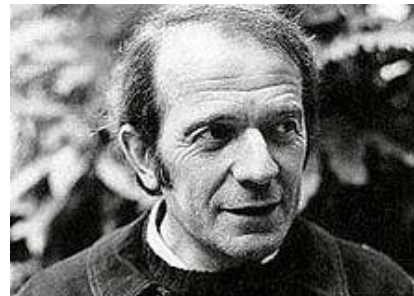
——ジル・ドゥルーズ+フェリックス・ガタリ『千のプラトー』

本日の構成

はじめに

自己・自著の紹介

1. ドゥルーズ哲学の粗描
2. 二つのカオス
 - 2.1. カオス (=カオスモス)
 - 2.2. カオス (≠カオスモス)
 - 2.3. カオイド (=カオスモス)
3. 『差異と反復』の時間論
 - 3.1. 不連続的瞬間
 - 3.2. 時間の三つの総合
4. ドゥルーズの芸術哲学
 - 4.1. 芸術作品=感覚の存在
 - 4.2. 老い
 - 4.3. 消尽しないもの



ジル・ドゥルーズ (1925-1995)



フェリックス・ガタリ (1930-1992)

はじめに

自己紹介

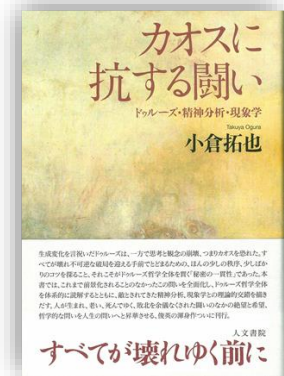
小倉拓也（おぐら・たくや）

- ・1985 年生。大阪府生まれ、滋賀県育ち。神戸市外国語大学外国語学部卒業。大阪大学大学院人間科学研究科博士前期課程ならびに博士後期課程修了。博士（人間科学）。現在、大阪大学国際共創大学院学位プログラム推進機構特任助教（常勤）。
- ・専門は哲学、現代思想。これまで主に、ジル・ドゥルーズなどのフランスの哲学者の基礎研究と、その成果に依拠した人間学的事象（誕生、老い、狂気、芸術、等）の哲学的研究を行ってきた。現在取り組んでいるのは、ドゥルーズの宗教哲学の理論的研究と、フランスの哲学者アンリ・マルティネの基礎研究。

自著紹介

『カオスに抗する闘い——ドゥルーズ・精神分析・現象学』人文書院、2018 年

- ・博士論文（「ジル・ドゥルーズの哲学における意味と感覚の論理学についての人間学的研究」大阪大学大学院人間科学研究科、2015 年）に加筆、修正を施した、ドゥルーズ哲学についての研究書。
- ・晩年に提示される「カオス」（≠カオスモス）および「カオスに抗する闘い」を主題とし、その観点からドゥルーズ哲学を最初期から晩年まで読み解く試み。「カオスに抗する闘い」はドゥルーズ哲学の「秘密の一貫性」であるという視座。
- ・「言うまでもなく人生全体は崩壊の過程である」（フィッツジェラルド）と看破したドゥルーズが、私たち——何より他ならぬ彼自身——が生まれ、生き、老い、死んでいくことを、その敗北を余儀なくされた闘いを、どのように問い、自身の哲学をつくり上げたのか、このことを「カオスに抗する闘い」の観点から論じる。
- ・「カオスに抗する闘い」の根本的な契機を、精神分析との対決のなかで構築される「器官なき身体」の概念、そして現象学との対決のなかで構築される「モニュメント」の概念に見だし、これらの概念構築の内実を明らかにする。



1. ドゥルーズ哲学の粗描

幾千の声を持つすべての多様なもののためのただひとつの同じ声、すべての水滴たちのためのただひとつの同じ〈大洋〉、すべての存在者のための〈存在〉のただひとつの喧騒。（『差異と反復』下 351 頁）

ドゥルーズ哲学が描く世界

- ただひとつの同じ〈大洋〉が、無限に多様な水滴たちを生み出すように、人間や事物などあらゆる存在者は、ただひとつの同じ〈存在〉が生み出す結果であり、効果である。
- ドゥルーズ哲学は、人間や事物を中心に据えるのではなく、人間や事物がそのひとつの結果であり、効果であるような、いまだ人間や事物の姿を持たない蠢きのようなものを中心に据える。
 - ▶ この蠢きのようなものを、ドゥルーズは「差異」と呼ぶ。ドゥルーズの哲学は、この意味における「差異」の哲学。

ドゥルーズの差異の考え方

- 従来の「差異」の考え方：水滴どうし——人間どうし、事物どうし——を比べる。つまり、出来上がったものたち（＝同一性を備えたものたち）のあいだに設けられる、対比的、対立的な区別。否定的な差異。
 - ▶ 差異は、同一性を前提とした、二次的なもの。
- ドゥルーズの差異の考え方：水滴たちを生み出す〈大洋〉の蠢き。つまり、同一性を備えた出来上がったものを、ひとつの結果、効果として生み出す、対立的でも、否定的でもない差異。
 - ▶ 差異は、同一性に先立つ、一次的なもの。

潜在的なものと現働的なもの

- この一次的な差異の領域は「潜在的なもの」、二次的な同一性を備えた領域は「現働的なもの」と呼ばれる。
 - ▶ 潜在的なものこそ、真に実在する。現働的なものは、真に実在する潜在的なもののひとつの結果、効果にすぎない。

- ▶ 潜在的なものから予測不可能な多様なものが生み出されること、つまり「潜在的なものの現働化」のプロセスが重要であり、現働的なものから出発して思考することでは、そのプロセスは覆い隠されてしまう。Cf. 「可能的なもの」

→ ドゥルーズのなかで「潜在的なものの現働化」には特権的な例がある。

- ▶ 多様な器官や組織を分化させていく、それ自体は器官や組織の姿を持たない「卵」。
- ▶ 多様な結晶化を引き起こす、それ自体は結晶の姿を持たない「過融解（過飽和）水溶液」。

一般的なドゥルーズ哲学の基本構図

潜在的なもの	→	現働的なもの
・〈大洋〉		・水滴
・〈存在〉		・存在者
・一次的な差異		・二次的な同一性と差異
・卵		・器官や組織を備えた有機体
・過融解水溶液		・結晶

→ ちなみに、この潜在的な差異の領域を、ドゥルーズは「カオス」（＝カオスモス）と呼ぶ。その他、「多様体」等々、そしていくらか図式に変更はあるが、後の有名な「リゾーム」等々も、基本的にはこれと同様のものだと考えられる。

- ▶ ドゥルーズ哲学は、この意味において、カオティックなものを礼讃する哲学として一般には理解されてきたし、実際にそれはドゥルーズ哲学の本懐だと言える。

→ しかし、このような潜在的なものの予測不可能で無尽蔵な生産力を言祝ぐドゥルーズは、疲れを知らない若くて無邪気なドゥルーズにすぎないとすれば？ もはや何も生み出されなくなるような、「疲労」、「老い」、「消尽」があるのでは？

- ▶ カオス（＝カオスモス）それ自体がいかに成り立ち、そしていかに崩壊するかを問う必要。

2. 二つのカオス

2.1. カオス（＝カオスモス）

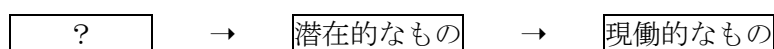
カオス（＝カオスモス）の構造

- 上で見た、潜在的な差異の領域、つまりカオス（＝カオスモス）は、何も生み出さない
無差異＝未分化な深淵ではなく、多様なものを生み出すシステム。
- システムの三つの構成的契機
 - ▶ 接続：バラバラで無関係＝無差異な諸要素を局所的に結びつける。局所的なまとまり、局所的なセリーを構成する。
 - ▶ 連接：いくつもの様々な局所的なセリーを取り集め、共存させ、関係づける。
 - ▶ 離接：共存し、関係し合うセリーから、それらセリーには還元できない、セリーには似ても似つかない「出来事」を生じさせる。

出来事？……Ex. ヒッチコック『サイコ』のシャワールームでの殺人

カオス（＝カオスモス）以前の何か

- カオス（＝カオスモス）は、諸要素の「セリー状の組織化」を前提とした、「発散する諸セリーの統一」としてのシステムのこと。
- つまり、カオス（＝カオスモス）は、接続、連接、離接をその不可欠の条件とする。
 - ▶ 逆に言えば、接続されざる諸要素は、無差異的であり、カオス（＝カオスモス）ですらない。それはカオス以前の何か。
 - ▶ そこからカオス（＝カオスモス）が三つの構成的契機とともに成り立ち、また、場合によっては、カオス（＝カオスモス）がそこへとほどけていくような何か。



2.2. カオス (≠カオスモス)

カオス (≠カオスモス)

→ 晩年、老ドゥルーズは、この何かを「カオス」(≠カオスモス)と呼び、定式化する。

カオスは、無秩序によってではなく、むしろ、そこに輪郭を現そうとする形態がすべてそれによって消散するところの無限速度によって定義される。カオスとは空虚であり、この空虚は、無ではなくある潜在的なものである。そこには、すべての可能な諸粒子、すべての可能な諸形態が含まれているのだが、これら諸粒子および諸形態は、共立性も準拠もなく、結果を生み出すことなしに出現しては即座に消失する。それは誕生と消滅の無限速度である。(『哲学とは何か』 200 頁)

- ▶ 注意しなければならないのは、このカオスは潜在的なものと呼ばれるが、何も生み出すことがない空虚であるという点。
- ▶ 着想源は、結晶化せずに結晶の核を消失する過融解水溶液。「そのような水溶液においては、小さな結晶の核が形成されるが、それら核はいかなる結果ももたらすことなく、現れそして溶解する」(『哲学とは何か』)。

→ 「粒子」＝要素、「形態・核」＝セリーと捉えることができる。では、そこに輪郭を現す形態、セリーが、すべて消散する「無限速度」とは？

- ▶ 喩えるなら、まばたきするたびに記憶喪失するかのような事態。「現出と消失が合致する」ようにして、あらゆる瞬間に諸要素がリセットされ、先行する要素が踏まえられながら、セリー化されることがない。

× 1、2、3……

○ 1、1、1……

カオイド (=カオスモス)

→ 老ドゥルーズの『哲学とは何か』の課題は、このようなカオスから、何とかして「カオイド」(=カオスモス)を成立させること。その営みが、哲学、科学、芸術。この意味において、哲学、科学、芸術は、いずれも「カオスに抗する闘い」。

- ▶ 有名な「哲学とは何か」という問いの答えである「概念の創造」とは、哲学は概念を案出することによってカオスに立ち向かう、カオスに抗する闘いだということ。

- ▶ 科学も、芸術も、それぞれの仕方でカオスに抗する闘いを実行する。

3. 『差異と反復』の時間論

3.1. 不連続的瞬間

若きドゥルーズにおけるカオス (≠カオスモス)

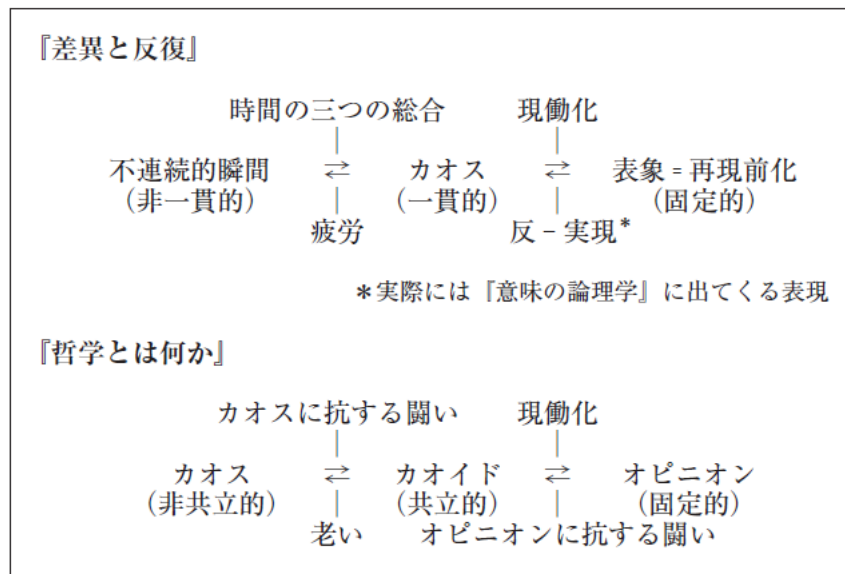
- 上で確認したとおり、このカオス (≠カオスモス) は、老ドゥルーズにおいて前景化される。若きドゥルーズが中心に据え、論究したのは、あくまでカオス (=カオスモス)。
- では、ドゥルーズはこれについて考えていなかったのか？

反復には、権利上、呈示される個々のものはそれぞれ完全に独立しているという意味が含まれている以上、いかにして反復は、反復する事例や要素に何らかの変化をもたらすというのか。反復における不連続性と瞬間性の規則は、次のように定式化される。つまり、先行するものが消えてしまわなければ、後続するものは現れない、と。[……] しかし、反復が出来上がるそばから壊れていく以上、いかにして「二番目」、「三番目」、また「同じである」などと言うことができるだろうか。 (『差異と反復』上 197 頁)

- ▶ 現在・過去・未来に関わる有名な「時間の三つの総合」の議論の冒頭で、総合以前の何かとしてかすかに触れられる、非時間的な「不連続的瞬間」。
- ▶ 「瞬間の継起は、時間をつくることはなく、それどころか時間を壊してしまう。それは生まれようとしてはつねに流産する点を示すだけである」 (『差異と反復』)。
- ▶ つまり、× 1、2、3……
○ 1、1、1……
- ▶ まさに老ドゥルーズが前景化する「誕生と消滅の無限速度」としてのカオス (≠カオスモス)。
- 事実、この不連続的瞬間の「接続」、「連接」、「離接」が、「現在」、「過去」、「未来」という「時間の三つの総合」として論じられる。この不連続的瞬間とは、接続されざ

る諸要素のことであり、上で問題としたカオス（＝カオスモス）以前の何かに相当する。

- 不連続的瞬間から、三つの契機によってカオス（＝カオスモス）を構成する「時間の三つの総合」は、「カオスに抗する闘い」の萌芽的試み。



(『カオスに抗する闘い』 31 頁)

3.2. 時間の三つの総合

時間の第一の総合：「想像」による諸要素の縮約

- 「先行するものが消えてしまわなければ、後続するものは現れない」ような、互いに無関係＝無差異であるバラバラの諸要素、つまり不連続的瞬間は、いかにしてまとまりをつくり、セリー化されるのか？
- 「想像」(imagination) によって。「縮約」(contraction) によって。

ヒュームが説明するには、互いに独立した、同じあるいは似ている諸事例は、想像のなかで融合される。想像はここで縮約の能力として、つまり感光板として定義される。想像は、後続するものが現れたときに、先行するものを保持する。想像は、諸々の事例、要素、振動、等質的瞬间を縮約し、それらを融合し、ある種の重みを持った内的な質的印象をつくり出す。(『差異と反復』上 198-199 頁、強調引用者)

- ▶ 一般に想像と言え、いま - ここにないものをありありと思い描くことだが、ここで重要なのは、それが根本的には「後続するものが現れたときに、先行するものを保持する」という点。
 - ▶ これによって、1、1、1……の果てしない呈示から、先行を保持し、後続を期待する、ミニマムな厚みを備えた局所的なセリーが形成される。「接続」に当たる。
- ドゥルーズはこの局所的なまとまりを「現在」と呼ぶ。時間の第一の総合とは、非時間的な不連続的瞬間からの、想像による、縮約による、厚みのある「現在」の総合。
- 想像は、すでに確立されている主体が使用する能力ではなく、それとともに初めて主体と呼ばれるものの原初的なまとまりが浮かび上がってくるようなもの。「私たちがそれであるところの原初的な感受性」(『差異と反復』)。「幼生の主体」(『差異と反復』)。

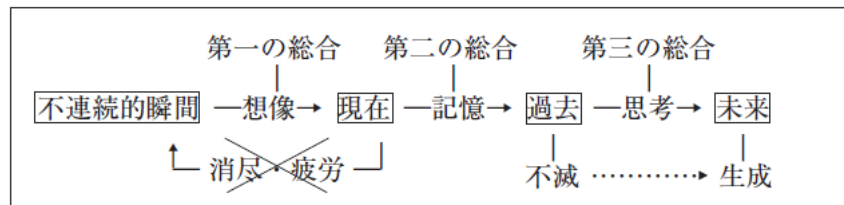
「現在」の限界：「疲労」

- 想像は、直前 - 直後の要素のみを保持できるにすぎず、現在はそのミニマムな単位を超えて永続することはできない。
- 厚みのある現在を持ちこたえることなく、不連続的瞬間へとほどけざるをえない。どうしようもなく局所的で有限。
- ▶ この現在のほどけが、「疲労」と呼ばれる。「疲労は、心が、みずから観照するものをもはや縮約できないような契機、つまり、観照と縮約が解体するような契機を示している」(『差異と反復』)。

時間の第二の総合：〈記憶〉と純粹過去

- それゆえ時間の総合は、不連続瞬間を縮約して総合された局所的な現在が、ほどけることなくそのなかで保存されるような、大域的な時間の形式を要請する。
- ▶ 〈記憶〉による純粹過去の総合。喩えるなら、すべての現在をそのなかに保存する巨大な時間の器のようなもの。
 - ▶ この時間の第二の総合は、すべてのセリー（現在）を共存させ、関係させること。「連接」に当たる。

- これ以上の詳細は省くが、重要な点は、想像によって総合された「現在」は、〈記憶〉による「純粹過去」の総合なしには、持ちこたえることなく、不連続的瞬間へとほどけてしまうということ。



(『カオスに抗する闘い』 94 頁)

4. ドゥルーズの芸術哲学

4.1. 芸術作品＝感覚の存在

『哲学とは何か』における「芸術とは何か」という問い

- カオスに抗する闘い。
- 無限速度で現れると同時に消える諸要素を、合成（縮約、観照）し、一時的に持ちこたえさせ、感覚可能にする。
- ▶ この感覚可能になったカオス（つまりカオイド、カオスモス）が「感覚の存在」と呼ばれ、「芸術作品」とはまさに感覚の存在であると定義される。
 - ▶ 概ね、『差異と反復』の時間の第一の総合と重なっている。異なるのは、感覚の存在は、〈記憶〉によることなく、現在の諸感覚だけで持ちこたえるという点。それは「モニュメント」と呼ばれる。

4.2. 古い

老ドゥルーズにおける「古い」の問題

- 『差異と反復』の時間の三つの総合、つまりカオス（＝カオスモス）の構成では、現在が不連続的瞬間へとほどけていく「疲労」が指摘されていたが、これはほとんどクリティカルなものではなかった。（〈記憶〉、純粹過去のおかげで。）

- しかし、晩年の『哲学とは何か』では、疲労が不可逆になること、つまりカオス（≠カオスモス）への不可逆的な落下が、最も苦しく、不安にさせるものとして指摘される。

どろどろに溶けた諸感覚が、ますます縮約しがたくなっていく要素や振動を取り逃す。このような事態を構成するのは、客観的な断絶や解体、またそれだけでなく、ある途方もない疲労でもある。老いとはまさにこのような疲労である。（『哲学とは何か』359 頁）

自分自身から逃れ去る思考、すでに忘却によって蝕まれ、別の諸観念のなかへと落下した、漏出し、粗描すらままならず消失する諸観念——そして落下先の諸観念もまた、私たちの支配を逃れていく——、これら以上に苦しく、不安にさせるものはない。それらこそ、消失と現出が合致する無限の変化可能性である。それらこそ、無色かつ沈黙の無の不動性と混じり合う無限速度であり、無限速度は本質も思考もなしにこの無を駆け巡る。（『哲学とは何か』337 頁）

- ▶ 老いとは、このように「心的カオスへの落下」であり、そこでは「もはや、どのように保存し、観照し、縮約するのか分からない」（『哲学とは何か』）。再開不可能な終わりへ。

4.3. 消尽しないもの

不可逆の「疲労」としての老いとその果ての「消尽」

- 老いは、ただ死を待つだけの絶望なのだろうか？ ドゥルーズは『哲学とは何か』の翌年の『消尽したもの』で、そのような絶望を「消尽」と概念化している。

消尽は、横たわっていることができず、夜が訪れても、テーブルに座ったまま、空っぽになった頭は、動けなくなった両手の上にある。[……] これは座ったまま、起き上がることも横たわることもできず死を待つ、最も恐ろしい姿勢である。最後に私たちをもう一度立ち上がらせ、そして永遠に横たわせる一撃をうかがいながら。座ったまま、そこから立ちなおることも、思い出ひとつ揺さぶることもできない。（『消尽したもの』13 頁）

- ドゥルーズは、「消尽」を「疲労」との対照において特徴づける。

- ▶ 消尽は、あらゆる可能的なものが尽き果て、死を待つだけの、文字通りの絶望。

- ▶ しかし疲労は、「決して終わりや最後の言葉ではなく、終わりの直前である」(『消尽したもの』)。そこにはいまだ「可能的なもの」が保持されている。
- ▶ 老いもまた、それが消尽ではなく「途方もない疲労」であるからには、そのような「可能的なもの」を、限界的状況のなかで保持しているはず。

老いにおいて現前するもの

- 老いは、不可逆の疲労なのだから、老いにおいて損なわれているのは、現在をほどけさせないものとしての〈記憶〉。
- ▶ つまり、老いにおいては、〈記憶〉なしの純粋な感覚が、過去なしの純粋な現在が、いままさに消え去るものとして、そのかぎりにおいて、現前する。

感覚は、神経の表面で、あるいは脳の容積のなかで、刺激を与えるものの振動を縮約する。先行するものは、後続するものが現れるとき、まだ消えない。これが、感覚がカオスに応答する仕方である。感覚は、諸々の振動を縮約することによって、それ自身が振動する。感覚は、いくつもの振動を保存することによって、それ自身を保存する。それはモニュメントである。(『哲学とは何か』355 頁、強調引用者)

記憶というものは芸術にほとんど介在しない(プルーストにおいてさえ、そしてプルーストにおいてはとりわけ)。たしかに、あらゆる芸術作品はひとつのモニュメントである。しかし、モニュメントはここで、過去を記念するものではなく、現前する＝現在の諸感覚のブロックであり、現前する＝現在の諸感覚は、おのれ自身の保存をおのれ自身だけに負う。モニュメントの行為、それは記憶ではなく仮構である。(『哲学とは何か』281-282 頁)

消尽しないもの

- 感覚の存在、芸術作品、モニュメントは、〈記憶〉によることのない、現在における現在の保存であり、過去へと乗り越えられることのない、そのかぎられた現在のなかで、それでもなお、「先行するものは、後続するものが現れるとき、まだ消えない」。
- 縮約され、合成された絆がほどけると、もはや老人の呆けでしかないような仮構のなかで、そのかぎりにおいて、先行するもの、もう消えてしまったはずのものを執拗に保持し、後続するもの、もうやってこないはずのものを執拗に期待する。

- ▶ すなわち、モニュメントは、私たち可滅的な存在者の不可逆の摩耗と消滅を超えて、「出来事を受肉する執拗な諸感覚を、未来の耳に託す」(『哲学とは何か』)。
 - ▶ この意味において、芸術作品、モニュメントは、「可能的なものの現存」と呼ばれる。「可能的なもの」とは、例えば、私が目を離したとき、いま - ここになくなったもの、例えば私の背後の世界が、消滅することなく存続することを信じられているもの。つまり、存続を信じられた世界。
- 芸術作品は、不連続的瞬间へのほどこ、カオス(≠カオスモス)への不可逆的な落下、不活性で粗野な「現にこうである」への還元に対して、それに尽きないもの、つまり「消尽しないもの」を、果たされるかどうかとは別に、「約束」(ロナルド・ボーグ)する。
- ▶ ドゥルーズはこの「約束」を、別の書物で「この世界を信じること」と呼び、そうして信じられた、信じられたかぎりで存続する自己および世界の絆を、「来たるべき民衆」と呼ぶ。
 - ▶ この崩壊を超えて幻視される絆、つまり来るべき民衆を召喚する闘いこそ、哲学、科学と並び立つ芸術の、しかし哲学と科学にはできない、芸術にだけ可能な特権的な闘いを構成する。
- ちょうど、「仮構」が、老ベルクソンにおいて、社会的紐帯の解体に際して宗教的な共同性を生み出す作用とされていたように、ドゥルーズにおける老いと芸術の問題は、ドゥルーズ晩年の宗教哲学を示しているのかもしれない。

以上

引用文献 (訳文は適宜変更している。訳者諸氏に感謝する。)

ジル・ドゥルーズ『差異と反復』上・下、財津理訳、河出文庫、2007 年

ジル・ドゥルーズ＋フェリックス・ガタリ『哲学とは何か』財津理訳、河出文庫、2012 年

ジル・ドゥルーズ＋サミュエル・ベケット『消尽したもの』宇野邦一＋高橋康也訳、白水社、1994 年